

弾を斬り裂いた日本刀

松村昌勝

(会員 佐伯市小島区)

私は、太平洋戦争中、砲艦「神津」の艦内で不思議な日本刀を手にしたことがある。それは戦争も末期的症状を現してきた昭和二十年（一九四五）二月二十五日のことであった。当時は、千葉県房総半島沖合に接近したアメリカ軍の航空母艦からグラマン戦闘機が飛び立ち、東京、横浜の上空を我が物顔に飛び交い銃撃、爆撃を繰り返していた。

横浜港メリケン棧橋（現在の大棧橋）を基地とする我が黒潮部隊の任務は、南太平洋マリアナ諸島のサイパン島から、日本本土空襲に向かう爆撃機の機数とその針路を洋上で確認し、速報を母艦宛て無線連絡して本土の警戒警報、空襲警報の早期情報提供に資するもので、鳥島の緯度線上に二隻を一組として等間隔にチャーター漁船（主にかつお、まぐろ漁船が徴用されていた）を配備し、新鋭大型爆撃機 B 29 の哨戒船の上空通過を昼夜の別な

く常時哨戒監視する重要な役割りを持つものであった。母艦は定期的または緊急に洋上の哨戒漁船団に対し、食糧の補給や急患の処置（盲腸患者を艦内に収容し手術したことがあった）等のためメリケン棧橋から哨戒線へ出撃する。私はこの部隊の母艦「神津」の航海士として戦闘配置に就いていた。

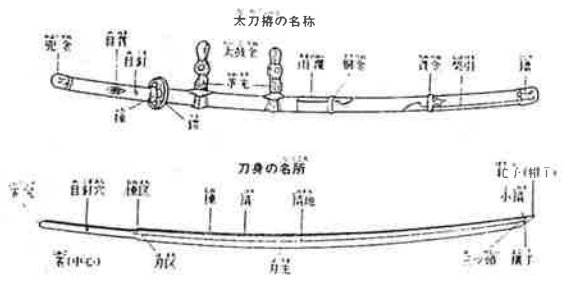
その日東京湾を出て野島崎灯台沖合を南下中、アメリカ軍戦闘機十五機に遭遇しその内の九機と対空戦闘を開始した。敵は三機編隊ごとに銃爆撃を反復し、我が方も艦上全対空砲火で応戦した。この戦闘で池田艦長は艦橋で戦死し、大久保航海長が代わって操艦を指揮し被弾を避けるため、面舵（右）、取り舵（左）と適切な急旋回を繰り返しながらも艦内からは全二五耗対空機関銃が火を吹いた。

投下された爆弾数発は左右両舷側近くの海面で爆発し、幸い艦への命中は免れたが機銃弾による兵員の被害は夥しく、艦橋と上甲板は瞬時にして血の海と化した。

戦死者の確認と重軽傷兵士の応急手当てが一段落した時、私は急用あって士官室に降りた。扉を開けると室内

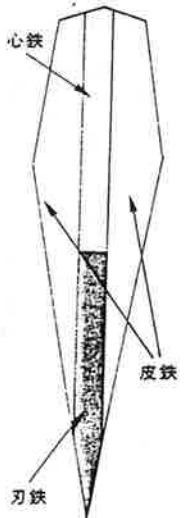
には硝煙の臭いが立ち込めている。その時、半開きになつた引き出しの取り手のところに付いた銃弾の跡らしい疵が眼に写つた。中には鞘に傷のある軍刀が見える。あ！これはA少尉の軍刀だ。私は部下の持ち物といへえ気になつたので手に取つて急ぎ抜き放ち刀身を良く見ると、中央部の両面に生々しく金属で削つた様な傷跡が二、三条あるのに気付いた。しかし少しの刃こぼれもない。一旦、鞘に収めて今度は革で外装してある鞘を見ると刃側の中程に最初見つけた傷の穴がある。そして反対側の刀の棟になる部分の両側に大小二つの引き裂かれた様な穴が開いていた。

すると、この日本刀は銃弾の直撃を受けて、それを真二つに斬り裂く程の、不思議な斬れ味”を持つていたのか。私は思わず唸り声



を發した。日本刀の斬れ味については、昔からいろいろと伝えられているが、鉄(金属)を斬つたという二、三の物語が頭をかすめた。鉄の籠手を一刀のもとに斬り落としたという織田信長の愛刀「籠手斬り正宗」や、来国行作と伝えられる太閤秀吉の名刀「釣鐘斬り」などがある。また、「庖丁藤四郎」というのは、庖丁がわりに使つたことがあるところからの命名である。多賀豊後守は料理の名人であつた。ある時意地の悪いのが鶴の体のなかに、魚を焼くときの鉄箸を差し込んでおいて、「豊後殿、庖丁さばきをお見せくだされ」と所望した。鉄箸の入れであることを看破した豊後守は、腰の短刀を抜き手も見せず鉄箸もろとも両断した。こうして庖丁の代用にしたことから、庖丁藤四郎と呼ぶようになったという。

本三枚鍔



日本刀は世界唯一の二重構造!!

私は、その後横須賀軍港を基地とする第二輸送隊所属の第一四七号輸送艦（戦車等の重車輛を積むことができ的大型上陸用舟艇）へ転任し、五月二十三日正午、伊豆諸島の八丈島海軍基地へ向け、陣地構築用資材を満載して横須賀軍港辺見棧橋を出航した。

途中、千葉県館山湾に仮泊し、翌二十四日同泊地を発つて南下午後八丈島神湊港に入港した。資材の陸揚げを終えて翌二十五日未明同港発、八丈富士、（八五四米）を経て横須賀港へ向け帰途に就いた。

その頃、小笠原諸島の中でも戦略上の最重要拠点である硫黄島が既にアメリカ軍の手に陥ち、陸上戦闘機による直接首都圏空襲が可能となっていた。艦内では小型機による東京空襲の情報をキャッチしていた。

丁度、相模湾から浦賀水道に入り館山沖に差し掛かった時、右舷前方の低い雲の切れ間から機銃掃射をしながら超低空で海面すれすれに近づく戦闘機三機を発見した。ノースアメリカンP51（ムスタング）だ！艦上の全二五耗機閥銃が一斉に火を吹く。この戦闘では戦死者三十名、重軽傷兵士が三十数名となり全甲板に鮮血が迸った。

私は、艦内帽を飛ばされて頭部受弾に気付いたが、同時に左頬と右上膊部にも裂傷を負った。また、左膝には盲管銃創を受け革の半長靴には粘血が溜まってきた。

艦尾では、敵弾により操舵装置のパイプが切断され蒸気が吹き出して舵が利かなくなり対岸の鋸山（三二九米千葉県安房郡鋸南町）を右や左に見ながら艦は左旋回を繰り返した。舵故障は間もなく復旧したが、被弾数は艦橋前面だけでも一、〇〇六発という激烈さであった。

艦内では、重傷兵士の応急手当を急ぎながら観音崎灯台を直ぐ左に見て横須賀基地へと全速帰投した。入港後直ちに重傷者を横須賀海軍病院へ送り出し、私ほか軽傷者も一応入院した。

その後私は、静岡県熱海市にある臨時海軍病院へ転院しレントゲン診断を受けた。大腿部盲管銃創は、戦闘機から発射する被包鉄鋼弾が窓などから直接入って来て部屋の内側の鉄板を打ち抜く時、中の鋭く尖った鉄鋼弾だけが鉄板を通り抜け、これを被包している外側の合金部は抜け切れずに破片弾となって逆行し、室内に飛び散って人員を殺戮するもので、その破片弾による盲管銃創で

あるという。この時の破片弾は今も私の左膝の大腿骨と皮膚との間で筋肉に巻き込まれた儘になっている。「神津」のA少尉の日本刀によって真二つに斬り裂かれた弾も当たった時のスピードと破片弾の大きさは異なっていない、私の体内に入っている弾と同じものではなかったろうか。

肥後藩初代細川幽斎の愛刀と伝えられる関の兼定の刀に、金銀象嵌で「さしもぐさ」と入れてある。これは、小倉百人一首にもある「かくとだにえやは伊吹のさしもぐさ、さしも知らじなもゆる思ひは」の「さしも知らじな」という詞を引き出すためのもので、「さしも知らじな」とは、これ程とは思うまいということである、結局、これほどの業物とは知るまいと自ら誇る意であり、「斬れ味」を誇ったものである。風流人 幽斎（細川藤孝）の面目躍如たるところの一面でもある。

A少尉の軍刀に仕込んだ日本刀も「斬れ味」において、関の「兼定」や「正宗」「国行」の名刀に勝るとも劣らぬ業物であったに違いない。

戦後間もなく茨城県那珂郡瓜連駅のプラットホームで

「神津」の元砲術長に奇遇しお互いの無事を祝し合った。「神津」は、私が第一四七号輸送艦へ転任した直後黒潮部隊の母艦の任務を解かれ、三陸沖合を北上して北海道へ向け航行中岩手県下閉伊郡山田湾沖でアメリカ軍潜水艦の魚雷攻撃を受け瞬時に沈没し、砲術長ほか数名の乗組員だけが僚艦に助けられたという。

A少尉の安否を聞き漏らしてしまったが、敵弾を真二つに斬り裂いて刃こぼれ一つしなかった不思議な力を持ったあの業物日本刀は、後世に伝えおくべき「彈丸斬り正宗」であったかもしれない。「神津」と運命を共にして岩手県の沖合に眠って居るのはいかにも残念というほかはない。

三ヶ月後の終戦を待たずに太平洋と浦賀水道に散った「神津」と輸送艦「第一四七号」の百数十柱の将兵の霊よ安かれ！と半世紀後に平和日本の天空を仰いで祈る。

私は、熱海臨時海軍病院を退院した後、海防艦「笠戸」へ転任し、八月十五日北海道小樽港の艦上で終戦の詔勅を聞いた。